

戸の建たる藏もなしとうたひながら往生うたがひなし孔子も酒ははかりなふして亂におよぶや不と點をつけて讀しもあり醉なやみて臥てあけの日またのまんといふいかなりととへば牆をへだて、蛤を賣聲をきくと述しも又命なりすべて酒の徳おほく古人書おける中にも旅の霧の身をとをさぬ雪の中をくぐるにもいたまぬ花を花と酒がいはする京哉といへるも

奇特かな○下  
略

〔本朝文粹記〕亭子院賜飲記

紀納言

延喜十一年夏六月十五日太上法皇多宝開水閣排風亭別喚大戸賜以淳酒蓋禪觀之暇法慮之餘遺避暑之情助送閑之趣也然應其選者唯參議藤原仲平兵部大輔源嗣右近衛少將藤原兼茂藤原俊蔭出羽守藤原經邦兵部少輔良峯遠視右兵衛佐藤原伊衡散位平希世等八人而已並皆當時無雙名號甚高雖飲酒及石如以水沃沙者也爰有勅命限二十盃盃内點墨定其痕際不增不減深淺平均遞各稱雄任口而飲及六七巡滿座酩酊不憲寒溫不知東西數稱見風起居不靜其尤甚者希世偃臥門外次極者仲平歐吐殿上其餘我而非我泥之又泥也或魂銷心迷戶居不驚或舌結語戾鳥囀難辨至如經邦者始示快飲意氣湯湯終事反瀉窮聲喧々纔不亂者伊衡一人殊有抽賞賜一駿馬事止十盃不復酌于時光景漸暮笙歌數奏各々纏頭倒載而歸有一病臣不飲獨醒具見行事走筆記之嗟呼始聞其名皆謂伯倫再生猶難相抗至見其實卽雖病老半死厥幾可及古之所謂羊公鶴者諸君之喻歟

〔嬉遊笑覽飲食記〕酒の飲くらべ昔よりあれど慶安のころ地黃坊樽次が大師河原の底深と酒戦の事水鳥記にして世に聞えたり底深樽次は作名なり水鳥記に大師河原に池上太郎左衛門底深とあり洞房語園に縣升見といふ醫師大師河原甚哲と酒戦の事をいへりその酒戦の杯は蜂と龍とを蒔繪にしたる大杯なりさすのむといふ謎なり七部集沽圃大師河原に遊びて樽